

# 小学校国語教育における基礎的素養の考察（４）

## 伝統的な言語文化に関わる教材について ②

鈴木 健一

### The consideration of fundamental knowledge in the Japanese language education of an elementary school (4) About the teaching materials related to a traditional language culture ②

Kenichi SUZUKI

#### 1. はじめに

平成 23 年に完全実施となった小学校学習指導要領。そこでは、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が、従前の〔言語事項〕にかわって新たに設定されていた。学習指導要領では、各学年における伝統的な言語文化に関わる指導事項は、以下のように整理されていた（表 1<sup>1)</sup>）。

筆者は、以前、平成 23 年度版の小学校国語の教科書に、伝統的な言語文化にかかわるどのような教材が用意されているかを調べた<sup>2)</sup>。その後平成 27 年版に改められたことから、新

版で採り上げられている教科書教材をここで整理しておきたい。

#### 2. 調査の結果

教科書会社 5 社の伝統的な言語文化に関わる教材は、別紙資料の通りである。なお整理するに当たって、次のようにした。

- ①他領域に配当されていても、内容や表記の面から伝統的な言語文化の教材と言えると判断したものは含める。
- ② 23 年版にはあるが 27 年版では使われていないものには■を、27 年版で新たに登場し

（表 1）伝統的な言語文化に関わる指導事項

第 1 学年及び第 2 学年	第 3 学年及び第 4 学年	第 5 学年及び第 6 学年
(ア) 昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。	(ア) 易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること。 (イ) 長い間使われてきたことわざや慣用句、故事成語などの意味を知り、使うこと。	(ア) 親しみやすい古文や漢文、近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、音読すること。 (イ) 古典について解説した文章を読み、昔の人のものの見方や感じ方を知ること。

たものには☆を付けて表示する。

③学年を変更して採り上げているものには▽を付けて表示する。

後載の資料のように、新教材との入れ替えもあり、数多くの作品や表現が教材として挙げられている。さらに、これらを区分してみると、(表2) のようになる。

(表2) 伝統的な言語文化教材の分野別教材数

① 昔話・神話	のべ 33	(異なり 25)	種類
② 短歌	のべ 215	(異なり 151)	種類
③ 俳句	のべ 132	(異なり 90)	種類
④ 川柳	のべ 3	(異なり 3)	種類
⑤ ことわざ	のべ 53	(異なり 39)	種類
⑥ 慣用句	のべ 60	(異なり 57)	種類
⑦ 故事成語	のべ 24	(異なり 8)	種類
⑧ 古文	のべ 25	(異なり 15)	種類
⑨ 漢詩	のべ 8	(異なり 5)	種類
⑩ 漢文	のべ 13	(異なり 10)	種類
⑪ 文語詩・文語文	のべ 6	(異なり 6)	種類
⑫ 落語	のべ 2	(異なり 2)	種類
⑬ 狂言	のべ 4	(異なり 4)	種類
⑭ 代表的な小説	のべ 2	(異なり 2)	種類
⑮ その他の関連知識	のべ 57	(異なり 53)	種類

### 3. 調査を終えて

筆者は、平成23年版の国語教科書における伝統的な言語文化に関わる教材について、低学年と中学年それぞれに用いられている語彙を抜きだし、分類してきた<sup>3)</sup>。今回の調査で分かった新教材の中の語彙を加え、さらに、高学年の語彙も加えて、全学年の語彙を明らかにするとともに、語彙指導の工夫や開発に反映させていきたい。

### 4. 注、引用、参考文献等

- 1) 『小学校学習指導要領解説 国語編』2011 東洋館出版社 p 24
- 2) 鈴木健一『小学校国語教育における基礎的素養の考察(1) 伝統的言語文化に関わる教材について』2013 千葉敬愛短期大学

紀要 第35号 p 103～122

- 3) 鈴木健一『小学校国語教育における基礎的素養の考察(2) 伝統的な言語文化に関わる教材の語彙について①』2014 千葉敬愛短期大学紀要 第36号 p 161～178  
鈴木健一『小学校国語教育における基礎的素養の考察(2) 伝統的な言語文化に関

わる教材の語彙について②』2015 千葉敬愛短期大学紀要 第37号 p 113～132

- ・『みんなと学ぶ小学校国語』一年～六年 平成27年度版 学校図書
- ・『国語』一～六 平成27年度版 光村図書
- ・『小学生の国語』一年～六年 平成27年度版 三省堂
- ・『小学生の国語 学びを広げる』二年～六年 平成27年度版 三省堂
- ・『ひろがる言葉 小学国語』1～6 平成27年度版 教育出版
- ・『新しい国語』一～六 平成27年度版 東京書籍

資料

伝統的な言語文化に関わる教材

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
学校図書	<p>むかしばなしを よみましょう (一上) 「うみの みずは なぜ しょっぱい」 (内容省略)</p> <p>むかしのものがたりをたのしもう (二上) 「ヤマタノオロチ」 (内容省略)</p> <p>とう場人ぶつになって読もう (二下) 「かさこじぞう」 (内容省略)</p>	<p>☆みんなで本を楽しもう(三上) 「三まいのおふだ」(昔話)</p> <p>言葉のリズムを感じてみよう(俳句三上)</p> <p>「ふる池や 蛙飛びこむ 水の音」 ■「夏河を越すうれしさよ手に草履」 ☆「やせがえる負けるな一茶これにあり」 ☆「青蛙おのれもペンキぬりたてか」 ☆「梅一輪一輪ほどのあたたかさ」 ☆「菜の花や月は東に日は西に」 ☆「咲き満ちてこぼるる花もなかりけり」 ☆「名月や池をめぐりてよもすがら」 「名月を取ってくれと泣く子かな」 ☆「柿の葉や一つ一つに月の影」 ☆「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」 ☆「月の夜や石に出て鳴くきりぎりす」 ☆「赤とんぼ筑波に雲もなかりけり」 ■「雪の朝二の字二の字の下駄のあと」</p> <p>言葉から風景を想ぞうしよう(短歌・百人一首 四上) 「嵐吹く三室の山のみみじ葉は 竜田の川の錦なりけり」 「大江山生野の道の遠ければ まだふみも見ず天の橋立」 「田子の浦にうち出でて見れば白妙 の富士の高嶺に雪は降りつつ」 「ほととぎす鳴きつる方をながむれば ただ有明の月ぞ残れる」 ☆「天の原ふりさけ見れば春日なる 三笠の山に出でし月かも」 ☆「君がため春の野に出でて若菜 つむわが衣手に雪は降りつつ」 ☆「小倉山峰のみみぢ葉心あらば 今ひとたびのみゆき待たなむ」 ☆「山里は冬ぞ寂しさまさりける 人目も草もかれぬと思へば」</p>	<p>言葉の文化に親しもう(宇治拾遺物語 五上) 「わたの原八十島かけてこぎ出で ぬと人には告げよあまの釣船」</p> <p>「御門「さて、なにも書きたらん物は、よみてんや」と、おほせられければ、「なににても、よみさぶらひなん」と申しければ、かたかなのねもじを十二書かせたまひて、「よめ」とおほせられければ、「ねこの子のねこ しゝの子の子しし」とよみたりければ、御門ほゝゑませたまひて、事なくてやみにけり」</p> <p>☆「今は昔、春つかた、日うららかなりけるに、六十ばかりの女のありけるが、虫うち取りてゐたりけるに、庭に雀のしありきけるを、わらはべ、石を取りて打ちたれば、当たりて、こしをうち折られにけり。羽をふためかしてまどふほどに、からすのかけりありきれば、「あな、心憂。からす取りてん。」とて、この女、急ぎ取りて、息しかけなどして、物食はず。」</p> <p>文語詩 ▽(六上→五上) 「名も知らぬ遠き島より 流れ寄るやしの実一つ ふるさとの岸をはなれて なればそも波にいく月 (中略) 思ひやる八重の潮々 いつれの日にか国に帰らん」</p> <p>随筆を書こう 「春はあけぼの。やうやう白くなり ゆく山ぎは、少し明かりて、むら さきだちたる雲の細くたなびきた</p>

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
学校図書		<p>☆「朝ぼらけ有明の月と見るまでに 吉野の里に降れる白雪」</p> <p>☆「山川に風のかけたるしがらみは 流れもあへぬもみぢなりけり」</p> <p>☆「久方の光のどけき春の日に しづ心なく花の散るらむ」</p> <p>☆「白露に風の吹きしく秋の野は つらぬきとめぬ玉ぞ散りける」</p> <p>☆「朝ぼらけ宇治の川霧たえだえに あらはれわたる瀬々の網代木」</p> <p>☆「さびしさに宿を立ち出でてなが むればいづくも同じ秋の夕暮れ」</p> <p>☆「夕されば門田の稲葉おとづれて 芦のまろやに秋風ぞ吹く」</p> <p>☆「高砂の尾上の桜咲きにけり 外山の霞立たずもあらなむ」</p> <p>☆「わたの原漕ぎ出でて見ればひさ かたの雲居にまがう沖つ白波」</p> <p>☆「秋風にたなびく雲の絶え間より もれ出づる月の影のさやけさ」</p> <p>☆「村雨の露もまだひぬ槇の葉に 霧たちのぼる秋の夕暮れ」</p> <p>☆「風そよぐならの小川の夕暮れは みそぎぞ夏のしるしなりける」</p> <p>言葉のいずみ(ことわざ・ 故事成語 ☆四字熟語 四下) ことわざ 「暑さ寒さもひがんで」 ☆「三人よれば文殊のちえ」 ☆「船頭多くして船山へ登る」 ☆「一を聞いて十を知る」 ☆「大山鳴動してねずみ一びき」 「犬も歩けばぼうに当たる」 「石の上にも三年」 「急がば回れ」 「馬の耳に念仏」 「ねこに小判」 「泣きつらにはち」 「花よりだんご」 「毒をくらわば皿まで」 「ちりも積もれば山となる」 ☆「さるも木から落ちる」</p>	<p>る。 夏は夜。(中略) 秋は夕暮れ。(中略) 冬はつとめて。(中略) 火をけ の火も白き灰がちになりてわろ し。」</p> <p>慣用句を集めよう ▽(四下→五上) ☆「水と油」 ☆「水に流す」 ☆「水が合わない」 ☆「水を得た魚のよう」 ☆「手が届く」 ☆「手が出ない」 ☆「手を入れる」 ☆「心がはずむ」 ☆「心を配る」 ☆「心がせまい」 ☆「身から出たさび」 ☆「身の毛がよだつ」 ☆「身もふたもない」</p> <p>短歌・俳句を作ろう(五下) 「この里に手まりつきつつ子ども らと遊ぶ春日は暮れずともよし」 「名月をとつてくれろとなく子かな」</p> <p>☆言葉の文化を体験しよう(六上) ☆「狂言 盆山」(内容省略)</p> <p>漢詩 尋胡隱君 高啓 渡水復渡水 看花還看花 春風江上路 不覺到君家</p>

小学校国語教育における基礎的素養の考察(4) 伝統的な言語文化に関わる教材について②

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
学校図書		☆「かっぱの川流れ」 ☆「弘法にも筆のあやまり」 ■「鶴のまねをするからず」 ■「こまった時の神だのみ」 ■「雨だれ石をうがつ」 ■「帯に短したすきに長し」 ■「にがした魚は大きい」 ■「立つ鳥あとをにごさず」 故事成語 ☆「朝三暮四」 「蛍雪の功」 「五十歩百歩」 「蛇足」 ☆「漁夫の利」 「温故知新」 ■「矛盾」      ■「一刻千金」 四字熟語 「一石二鳥」 「心機一転」 「八方美人」 慣用句 ■「ねこのひたい」 ■「ねこの手も借りたい」 ■「目を丸くする」 ■「へそが茶をわかす」 ■「頭から湯気」    ■「息を殺す」 ■「身を粉にする」 ■「こおどりする」 ■「あわを食う」    ■「図に乗る」 ■「目を光らす」    ■「鼻が高い」 ■「口がすべる」    ■「かたを落とす」 ■「まな板のこい」 ■「すずめのなみだ」 ■「票を読む」	

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
光 村 図 書	「おむすび ころりん」(一上) (内容省略)	声に出して楽しもう(三上) ■「かすみたつながきはるひにこ どもらとてまりつきつつこのひ くらしつ」	古典の世界(一)(五年) 竹取物語 「今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。
	きいて たのしもう(一下) 「まの いい りょうし」 (内容省略)	☆俳句を楽しもう 「古池や蛙飛びこむ水の音」 「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」 「春の海終日のたりのたりかな」 「菜の花や月は東に日は西に」 「雪とけて村いつぱいの子どもかな」 「痩せ蛙まけるな一茶これにあり」	その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。」
	きいて たのしもう(二上) 「いなばの 白うさぎ」 (内容省略)	■「やれ打つな蠅が手をすり足を する」	平家物語 「祇園精舎の鐘の声、 諸行無常の響きあり。 沙羅双樹の花の色、 盛者必衰の理をあらはす。 おごれる人も久しからず、 ただ春の夜の夢のごとし。 たけき者もつひには滅びぬ、 ひとへに風の前の塵に同じ。」
	きせつのことば1(二上) 「春が いっぱい」	「いろは歌」 「いろはにほへと ちりぬるを わかよたれそ つねならむ うゑのおくやま けふこえて あさきゆめみし ゑひもせす」	徒然草 ☆「つれづれなるままに、日暮らし、 硯に向かひて、心にうつりゆくよ しなし事を、そこはかとなく書き つくれば、あやうこそものぐる ほしけれ。」
	きせつのことば2(二上) 「夏が いっぱい」	聞いて楽しもう(三上) ☆「たのきゅう」 (内容省略)	おくのほそ道 ☆「月日は百代の過客にして、行 きかふ年もまた旅人なり。舟の上 に生涯を浮かべ、馬の口とらへて 老いを迎ふる者は、日々旅にして 旅をすみかとす。」
	聞いてたのしもう(二下) 「三まいのおふだ」 (内容省略)	きせつ言葉1(三上) 「春の楽しみ」	
	きせつのことば3(二下) 「秋が いっぱい」	きせつ言葉2(三上) 「夏の楽しみ」	
	きせつのことば4(二下) 「冬が いっぱい」	声に出して楽しもう(三下) 短歌を楽しもう ▽「むしのねものこりすくなくなり にけりよなよなかぜのさむくし なれば」 「秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞおどろかれぬる」 ▽「奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の 声聞く時ぞ秋は悲しき」	古典の世界(二)(五年) 論語 「子曰く、「己の欲せざる所は、人 に施すこと勿かれ。」と。」 「子曰く、「過ちて改めざる、是を 過ちと謂ふ。」と。」 漢詩 ☆春暁 「春眠 暁を覚えず

小学校国語教育における基礎的素養の考察(4) 伝統的な言語文化に関わる教材について②

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
光村図書		<p>「天の原ふりさけ見れば春日なる 三笠の山に出でし月かも」</p> <p>「三年とうげ」(三下) (内容省略)</p> <p>きせつの言葉3 (三下) 「秋の楽しみ」</p> <p>きせつの言葉4 (三下) 「冬の楽しみ」</p> <p>☆ことわざについて調べよう (三下) ☆「急がば回れ」 ☆「わらう門には福来たる」 ☆「おびに短したすきに長し」 ☆「頭かくしてしりかくさず」 ☆「さるも木から落ちる」 ☆「犬も歩けばぼうに当たる」 ☆「所かわれば品かわる」 ☆「ねこの手もかりたい」 ☆「やなぎの下にいつもどじょうは いない」 ☆「わかいときの苦労は買ってせよ」 ☆「わが身をつねって人のいたさを 知れ」 ☆「ねこにこぼん」 ☆「鳴くねこはねずみとらず」 ☆「ねこの首にすず」 ☆「ねこを追うより魚をのけよ」 ☆「ねこにまたたび」 ☆「ねこにかつおぶし」</p> <p>声に出して楽しもう (四上) 短歌・俳句に親しもう (一) ☆「岩走る垂水の上のさわらびの 萌え出づる春になりけるかも」 「君がため春の野に出でて若菜摘む 我が衣手に雪は降りつつ」 ☆「見渡せば柳桜をこきまぜて 都ぞ春の錦なりける」 「名月や池をめぐる夜もすがら」 「夏河を越すうれしさよ手に草履」</p>	<p>処処 啼鳥を聞く 夜来 風雨の声 花落つること 知る多少」</p> <p>聞いて楽しもう (五年) ☆「見るなのざしき」 (内容省略)</p> <p>古典に親しもう (五年) ☆「浦島の太郎」(「御伽草子」より) (内容省略) ☆「犬と肉の事」(「伊曾保物語」 より) (内容省略)</p> <p>季節の言葉1 (五年) 「春の空」</p> <p>季節の言葉2 (五年) 「夏の夜」</p> <p>季節の言葉3 (五年) 「秋の夕暮れ」</p> <p>季節の言葉4 (五年) 「冬の朝」</p> <p>聞いて楽しもう (六年) 「河鹿の屏風」 (内容省略)</p> <p>伝統文化を楽しもう (六年) 「狂言 柿山伏」 (内容省略)</p> <p>声に出して楽しもう (六年) 天地の文 福沢諭吉 「天地日月。東西南北。きたを背 に南に向かひて右と左に指させ ば、ひだりは東、みぎはにし。日輪、 朝は東より次第にのぼり、暮れは またににしに没して、夜くらし。一 昼一夜変わりなく、界を分けし午</p>

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
光村図書		<p>「雀の子そこのけそこのけ御馬が通る」</p> <p>☆聞いて楽しもう ☆「ふるやのもり」 (内容省略)</p> <p>きせつの言葉1(四上) 「春の風景」</p> <p>きせつの言葉2(四上) 「夏の風景」</p> <p>慣用句(四下) 「火花を散らす」 「頭をひねる」 「心がおどる」 「借りてきたねこ」 「虫の知らせ」 「うり二つ」</p> <p>「実を結ぶ」 「エンジンがかかる」 「メスを入れる」 「竹を割る」 「手に取る」 「水を打つ」 「きつねにつままれる」 「むねを打つ」 「息を殺す」 「えりを正す」 「油を売る」 「型にはまる」 「世話を焼く」 「なみだをのむ」</p> <p>☆短歌・俳句に親しもう(二)(四下) ☆「晴れし空仰げばいつも 口笛を吹きたくなりて 吹きてあそびき」 「金色のちひさき鳥のかたちして 銀杏ちるなり夕日の岡に」 「ゆく秋の大和の国の薬師寺の</p>	<p>前午後、前後合わせて二十四時、時をあつめて日を計へ、日数つもりて三十の数に満つれば一か月、大と小とにかかはらず、あらし分けし四週日、一週日の名目は日月火水木金土、一七日に一新し、一年五十二週日、第一月の一日は年たち回る時なれど、春の初めは尚遅く初めて来る第三月、春夏秋冬三月づつ合わせて三百六十日、一年一年又一年、百年三万六千日、人生わづか五十年、稚き時に怠たらば老いて悔ゆるも甲斐なかるべし。」</p> <p>季節の言葉1(六年) 「春のいぶぎ」</p> <p>季節の言葉2(六年) 「夏のさかり」</p> <p>季節の言葉3(六年) 「秋の深まり」</p> <p>季節の言葉4(六年) 「春を待つ冬」</p> <p>■高名の木登り 「高名の木登りといひし男、人をおきてて、高き木に登せて、こずえを切らせしに、いと危く見えしほどは、言ふこともなくて、降るる時に、軒たけばかりになりて、「あやまちすな。心して降りよ。」と、言葉をかけはべりしを、「かばかりになりては、飛び降るとも降りなん。いかにかく言ふぞ。」と申しはべりしかば、「そのことにさうらふ。目くるめき、枝危きほどは、己が恐れはべれば、申さず。あやまちは、安き所になりて、必ずつかまつることにさうらふ。」と言ふ。」</p>

小学校国語教育における基礎的素養の考察(4) 伝統的な言語文化に関わる教材について②

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
光村図書		<p>塔の上なる一ひらの雲]                      「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」                      ☆「桐一葉日当たりながら落ちにけり」                      ☆「外にも出よ触るるばかりに春の月」</p> <p>☆百人一首に親しもう(四下)                      ☆全百首</p> <p>季節の言葉3(四下)                      「秋の風景」</p> <p>季節の言葉4(四下)                      「冬の風景」</p> <p>■「荒海や佐渡によこたふ天の河」                      ■「さみだれや大河を前に家二軒」                      ■「田子の浦に打ち出でて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」                      ■「これやこの行くも帰るも別れては知るも知らぬも逢坂の関」                      ■「咳の子のなぞなぞあそびきりもなや」                      ■「ふるさとの山に向かひて言ふことなし                      ふるさとの山はありがたきかな」</p>	<p>■「子曰く、「学びて思はざれば、則ち罔し。思ひて学ざれば、則ち殆し。」と。」</p>

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
三省堂	<p>むかしばなしを たのしもう(一下) 「いなばの 白ウサギ」 (内容省略)</p> <p>むかし話を楽しもう(二年) 「かさこじぞう」 (内容省略)</p> <p>読書の森(二年 学びを広げる) 「スーフと馬頭琴」(モンゴル民話) (内容省略) 「古屋のもり」</p> <p>■「ももたろう」 「ももたろうさん、こしにつけたきびだんごを一つくださいな。」「いいよ、その代わりに、いっしょにおにをたい治にいこう。」 おにが島に着いたももたろうたちは、たくさんのおにたちに勇かに立ち向かっていきました。 ももたろうは、たから物をたくさん持って、おじいさんとおばあさんのもとに帰ってきました。」</p> <p>■「さるかに合戦」 「「かにさんのかたき！」うすが屋根の上から、どすん！と落ちてきました。」</p> <p>■「ぶんぶく茶釜」 「おじいさんが店の戸を開けると、そこに見事な茶がまが一つ、置いてありました。」</p> <p>■「花さかじいさん」 「おじいさんが、かれ木の上からはいをまくと、たちまちさくらの花が一面にさきました。」</p>	<p>声に出して読もう一俳句(三年) 「古池やかはづとびこむ水の音」 「さみだれを集めて早し最上川」 「なの花や月は東に日は西に」 「ぼたんちりてうち重なりぬ二三べん」 「やせがへる負けるな一茶これにあり」 「雪とけて村いっばいの子どもかな」 「かき食えばかねが鳴るなり法隆寺」 「いくたびも雪のふかさをたづねけり」</p> <p>読書の森(三年 学びを広げる) 星取り 「こぞう あり。さよ ふけて 長ざおを 持ち、庭を あなたこなたと ふりまわる。(中略) 屋根へ 上がれ。」と 言われた。」 いろは歌 「色はにおえど 散りぬるを (中略) えいもせず」 竹取物語 「今は昔、竹取の翁というもの ありけり。(中略) いたうつくしゅうて あたり。」 「かかるほどに、よい、うち過ぎて、子の時ばかりに、家の辺り、昼の明さにも過ぎて、光りたり。(中略) あい戦わん心も なかりけり。」</p> <p>落語 じゅげむ(四年) (内容省略)</p> <p>声に出して読もう一短歌(四年) 「東の野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば月かたぶきぬ」 「ひさかたの光りのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」 「いにしへの奈良の都の八重ざくら</p>	<p>狂言「しびり」(五年) (内容省略)</p> <p>国語辞典で受けつぐ言葉の文化(五年) 「板につく」 「情けは人のためならず」 「役不足」 「気が置けない」 「雨ふって地固まる」 「良薬は口に苦し」 「耳に逆らう」</p> <p>漢字辞典で受けつぐ言葉の文化(五年) 「登竜門」 「他山の石」 「水魚の交わり」 「太公望」 「助長」</p> <p>読書の森(五年 学びを広げる) 漢詩 絶句 江碧鳥逾白 山青花欲然 今春看又過 何日是帰年</p> <p>春曉 春眠不覚曉 处处聞啼鳥 夜来風雨声 花落知多少</p> <p>平家物語 「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす。おごれる人も久しからず、ただ春の夢のごとし。</p>

小学校国語教育における基礎的素養の考察(4) 伝統的な言語文化に関わる教材について②

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
三省堂		<p>けふ九重にほひぬるかな 「箱根路をわれこえくれば伊豆の海 やおきの小島に波のよる見ゆ」 「かすみ立つ長き春日に子どもらと 手まりつきつつこの日くらしつ」 「楽しみはまれに魚にて子らみなが うましようましと言ひて食ふ時」 「夏のかぜ山よりきたり三百の 牧のわか馬耳吹かれけり」</p> <p>想ぞうをふくらませよう(四年) 故事成語の物語 「漁夫の利」 (内容省略)</p> <p>読書の森(四年 学びを広げる) ☆「まんじゅうこわい」 (内容省略) 小倉百人一首 「春すぎて夏来にけらし白たえの 衣ほすちよう天の香具山」 「田子の浦にうちいでて見れば白た えの富士のたかねに雪は降りつつ」 「天の原ふりさけ見れば春日なる 三笠の山にいでし月かも」 ☆「人はいさ心も知らずふるさとは 花ぞ昔の香ににおいける」</p> <p>浦島太郎 「昔、丹後国に 浦島という者 は べりしに、その子に 浦島太郎と 申して、年のよわい 二十四、五の おのこ ありけり。 明け暮れ、海のうろくずを取りて、 父母を養いけるが、ある日の つれ づれに、つりをせんとて いでにけ り。(中略) このかめを もとの海に 返しけ る。」</p>	<p>たけき者もついには滅びぬ、 ひとえに風の前のちりに同じ。」</p> <p>声に出して読もう—漢文(六年) 「学びて時にこれを習う、亦た説 ばしからずや。 朋あり、遠方より来たる、亦た 楽しからずや。」 「吾れ日に三たび吾が身を省み る。」 「故きを温めて新しきを知る、以 て師と為るべし。」 「仁者は必ず勇有り。勇者は必ず しも仁有らず。」 「己の欲せざる所は人に施すこと 勿かれ。」</p> <p>読書の森(六年 学びを広げる) 枕草子 「うつくしきもの。うりにかきたる ちごの顔。(中略) 頭は尼そぎなるちごの、目に髪 の覆えるを、かきはやらで、うち かたぶきて物など見たるも、うつ くし。」 徒然草 「八つになりし年、父に問いてい わく、「仏はいかなるものにか候 うらん。」と言う。父がいわく、「仏 には、人のなりたるなり。」と。(中 略) 諸人に語りて興じき。」 おくのほそ道 「月日は百代の過客にして、行き こう年もまた旅人なり。(中略) 面八句をいおりの柱に懸け置く。」 「夏草や兵どもが夢の跡」 「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」 「五月雨を集めて早し最上川」 「荒海や佐渡によこたう天の河」</p>

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
教育出版	<p>むかしの おはなしを たのしむ (一下) 「天に のぼった おげやさん」 (内容省略)</p> <p>☆「いろは」を しろう (二上) 「いろは歌」</p> <p>☆七草をおぼえよう (二下) 「春の七草」 「秋の七草」</p> <p>音読はっぴょう会をしよう (二下) 「かさこじぞう」 (内容省略)</p> <p>むかしのお話を楽しもう (二下) 「いなばの しろうさぎ」 (内容省略)</p> <p>■本の世界を楽しむ (二下) ■「ないた赤おに」 (内容省略)</p>	<p>日本語のひびきにふれよう (三上) 俳句に親しむ 「雪とけて村いっばいの子どもかな」 「菜の花や月は東に日は西に」 「はねわっててんとう虫のとびいずる」 「さじんめて童たのしも夏氷」 「荒海や佐渡によことう天河」 「かきくえばかねが鳴るなり法隆寺」 「せきの子のなぞなぞあそびきりもなや」 「うつくしきひよりになりぬ雪のうえ」 ☆「妹を泣かして上がる絵すごろく」</p> <p>☆きせつの言葉を集めよう—春・夏— (三上) 「古池やかわずとびこむ水のおと」 「顔じゅうを蒲公英にしてわらうなり」 「日やけ顔見合いてうまし氷水」 「ひっぱれる糸まつすぐやかぶと虫」</p> <p>■きせつと言葉 (三上) ■「八節」 ■「年中行事」</p> <p>☆きせつの言葉を集めよう—秋・冬— (三下) 「赤とんぼ葉末にすがり前のめり」 「名月やたたみの上まつのかげ」 「スケートのひもむすぶ間もはやりつつ」 「雪の朝二の字二の字のげたのあと」</p> <p>日本の文化に親しもう (三下) ことわざ・慣用句 ことわざ 「さるも木から落ちる」 「かつばの川流れ」 「弘法にも筆のあやまり」 「上手の手から水がもれる」 「善は急げ」</p>	<p>日本語のひびきを味わおう (五上) 漢文に親しむ ・春暁 孟浩然 「春眠 暁を 覚えず 処処に 啼鳥を 聞く 夜来 風雨の 声 花 落つる こと 知る 多少」 ・春夜 蘇軾 「春宵 一刻 値 千金 花に 清香 有り 月に 陰 有り 歌管 楼台 声 細細 鞦韆 院落 夜 沈沈」 ・静夜思 李白 「牀前 月光を 見る 疑うらくは 是れ 地上の 霜 かと 頭を 挙げて 山月を 望み 頭を 低れて 故郷を 思う」</p> <p>「故きを温ねて新しきを知る (『論語』)」 「心焉に在らざれば視れども見えず聴けども聞こえず食らえども其の味を知らず (『大学』)」</p> <p>☆鳥 (五上) ☆「すずめのなみだ」 ☆「鳥ぐもり」 ☆「花鳥風月」 ☆「立つ鳥あとをにごさず」 ☆「からすのぬれ羽色」 ☆「からす なぜなくの からすは山に かわい七つの 子があるからよ」 ☆「うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば」 ☆「雀の子そこのけそこのけお馬が通る」 ☆「目には青葉山ほととぎすはつ松魚」</p>

小学校国語教育における基礎的素養の考察(4) 伝統的な言語文化に関わる教材について②

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
教育出版		<p>「急がば回れ」</p> <p>慣用句</p> <p>「ほねがおれる」</p> <p>「ほね身をけずる」</p> <p>「ほねをおしむ」</p> <p>「ほね身にこたえる」</p> <p>「頭が上がらない」</p> <p>「頭をかかえる」</p> <p>「頭をひねる」</p> <p>「むねがいたむ」</p> <p>「むねがおどる」</p> <p>「むねがいっぱいになる」</p> <p>「馬が合う」</p> <p>☆「つるのひと声」</p> <p>☆「竹をわたよう」</p> <p>☆「水をさす」</p> <p>☆「水に流す」</p> <p>☆「水をえた」</p> <p>■「うり二つ」 ■「水入らず」</p> <p>■「水入り」 ■「水ぎわだつ」</p> <p>■「すずめの子そこのけそこのけお馬が通る」</p> <p>■「スリッパをこえかねているこねこかな」</p> <p>■「夏川をこすうれしさよ手に草履」</p> <p>■「しずかさや岩にしみいるせみの声」</p> <p>■「青がえるおのれもペンキぬりたてか」</p> <p>■「名月をとってくるとなく子かな」</p> <p>■「空遠く声あわせ行く小鳥かな」</p> <p>■「秋の蚊のよろよると来て人をさす」</p> <p>■「こがらしや海に夕日をふき落とす」</p> <p>■「うまそうな雪がふうわりふうわりと」</p> <p>■「えりまきに首引き入れて冬の月」</p> <p>日本語のひびきにふれよう(四上)</p>	<p>日本の文化を考えよう(五下)</p> <p>「古典」を楽しむ</p> <p>「今は昔、竹取の翁といふ者ありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきの造となむいひける。その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。」</p> <p>「祇園精舎の鐘の声、諸行無常のひびきあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰のことわりをあらわす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もつひにはほろびぬ、ひとへに風の前のちりに同じ。」</p> <p>「はととありのことある川のほとりに、あり、遊ぶことありけり。にはかに水かさ増さりきて、かのありをさそひ流る。(中略) そのごとく、人の恩を受けたらむ者は、「いかさまにもそのむくひをせばや。」と思ふころざしをもつべし。」</p> <p>☆折り句を作ろう(五下)</p> <p>☆「小倉山 峰たちならし 鳴く鹿の 経にけむ秋を 知る人ぞなき」</p> <p>附子(狂言)(五上) (内容省略)</p> <p>☆短歌や俳句を楽しもう(五下)</p>

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
教育出版		<p>短歌の世界  「東の野にかぎろいの立つ見えて  かえり見すれば月かたぶきぬ」  「秋来ぬと目にはさやかに見えねど  も風の音にぞおどろかれぬる」  「見わたせば花ももみじもなかりけ  り浦の苫屋の秋の夕ぐれ」  「かすみたつ長き春日に子どもらと  手まりつきつつこの日くらしつ」  「金色のちいさき鳥のかたちして  いちょうちるなり夕日のおかに」  「たわむれに母を背負いて  そのあまりの軽きに泣きて  三歩あゆまず」</p> <p>月のつく言葉(四上)  ・満ち欠けによる月のよび方  ■月の異名</p> <p>物語の世界を想像して、音読したり、  えんじたりしよう(四上)  「ぞろぞろ(落語)」  (内容省略)</p> <p>☆もみじ(四下)  ☆「もみじがり」  ☆「もみじを散らす」  ☆「もみじおろし」  ☆「もみじのような手」  ☆「たつたひめ」  ☆「このたびはぬさもとりあえず手  向山もみじのにしき神のまにまに」  ☆「あらしふく三室の山のもみじ葉  はたつたの川のにしきなりけり」  ☆「秋の夕日に照る山紅葉  こいもうすいも数ある中に  松をいろうどるかえでやつたは  山のふもとのすそもよう」</p> <p>日本の文化に親しもう(四下)  故事成語  「五十歩百歩」  「漁夫の利」</p>	<p>短歌・俳句  ☆「四万十に光の粒をまきながら  川面をなでる風の手ひら」  ☆「岩走る垂水の上のさわらびの  萌え出づる春になりけるかも」  ☆「古池や蛙飛びこむ水のおと」  ☆「東の野にかぎろひの立つ見えて  かへり見すれば月かたぶきぬ」  ☆「菜の花や月は東に日は西に」  ☆川柳  ☆「芭蕉翁ぼちやんといふと立ち  留まり」  ☆「本ぶりになつて出てゆくあま  やどり」  ☆「はへば立て立てば歩めの親心」</p> <p>■江南の春 杜牧  「千里 鶯 啼きて 緑 紅に  映ず  水村 山郭 酒旗の 風  南朝 四百八十寺  多少の 楼台 烟雨の 中」</p> <p>■山亭の夏日 高駢  「緑樹 陰 濃やかにして 夏日  長し  楼台 影を 倒にして 池塘に  入る  水精の 簾 動きて 微風  起こり  満架の 薔薇 一院 香し」</p> <p>■「学びて時に之を習う、亦た説  ばしからずや。朋の遠方より来た  るあり、亦た楽しからずや」  ■「吾十有五にして学に志す。  三十にして立つ。四十にして惑わ  ず。五十にして天命を知る。六十  にして耳順う。七十にして心の欲  する所に従いて矩を躡えず。」</p> <p>■「古典」の言葉にふれよう(五下)  ■「一の巻よりして、人もまじら</p>

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
教育出版		<p>「蛇足」 「矛盾」 ☆「背水の陣」 ☆「推敲」 「杞憂」 ☆「他山の石」 ☆「助長」 ☆「守株」 ☆「朝三暮四」 「蜚雪の功」 ■「とらの威を借るきつね」</p> <p>「百人一首」を読もう(四下) 「あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかもねん」 「田子の浦にうちいでてみれば白妙の富士の高嶺に雪はふりつつ」 「天の原ふるさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」 「君がため春の野にいでて若菜つむわが衣手に雪はふりつつ」 「しのぶれど色にいでにけりわがこいほものや思うと人の問うまで」 「夕されば門田の稲葉おとずれてあしのまろやに秋風ぞふく」 「秋風にたなびく雲のたえまよりもれいずる月のかげのさやけさ」 「ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる」</p> <p>■「寿限無(落語)」(四下) (内容省略)</p>	<p>ず、机帳の内のうちふして引きいでつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。昼は日ぐらし、夜は目の覚めたる限り、灯を近くともして、これを見るよりほかのことなければ、おのづからなどは、そらにおぼえうかぶをいみじきことに思ふに、…」</p> <p>■「いづれの御時にか、女御、更衣あまたさぶらひたまひける中に、いとやむことなききはにはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。」</p> <p>■「雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ 丈夫ナカラダヲモチ (中略) サウイウモノニ ワタシハナリタイ」</p> <p>日本語のひびきを味わおう(六上) 「春はあけぼの。 やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。 夏は夜。 月のころはさらなり。(中略) 秋は夕暮れ。 夕日のさして山の端いと近うなりたるに、鳥の(中略) 冬はつとめて。 雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜のいと白きも。(中略) 火桶の火も、白き灰がちになりてわろし。」</p> <p>☆雨(六上) ☆「霧雨」 ☆「しのつく雨」 ☆「梅雨」 ☆「時雨」 ☆「天泣」</p>

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
教育出版			<p>☆「雨宿り」            ☆「雨降り花」            ☆「雨が降ろうがやりが降ろうが」            ☆「雨降って地固まる」</p> <p>☆回文を作ろう（六下）</p> <p>日本の文化を考えよう（六下）            言葉は時代とともに            「田子の浦ゆうちいでて見れば真            白にぞ富士の高嶺に雪は降りけ            る」            「淡海の海夕波千鳥汝が鳴けば            心もしのに古思ほゆ」            「瓶にさす藤の花ぶさみじかけれ            ばたゝみの上にとゞかざりけり」            「くれなあゐの二尺伸びたる薔薇の            芽の針やはらかに春雨の降る」            「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」            「いくたびも雪の深さを尋ねけり」</p> <p>「親譲りの無鉄砲で小供の時から            損ばかりして居る。小学校に居る            時分学校の二階から飛び降りて            (中略)            弱虫やーい。と囃したからであ            る。」</p> <p>「或る春の日暮です。            唐の都洛陽の西の門の下に、            ぼんやり空を仰いでゐる、一人の            若者がありました。(中略)            憐な身分になつてゐるのです。」</p> <p>■「つれづれなるままに、日暮らし、            すずりに向かひて、心にうつりゆ            くよしなしごとを、そこはかたなく            書きつくれば、あやうこそもの            ぐるほしけれ。」</p> <p>■「月日は百代の過客にして、行            きかふ年もまた旅人なり。舟の上            に生涯をうかべ、馬の口とらへて            老いをむかふる者は、日々旅にし</p>

小学校国語教育における基礎的素養の考察(4) 伝統的な言語文化に関わる教材について②

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
教育出版			<p>て旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。』</p> <p>■『アイヌ神脩謡集』（知里幸恵訳）の紹介</p> <p>■『おもしろそうし』（外間守善訳）の紹介</p> <p>■「吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生まれたか頼と見当がつかぬ。何でも薄暗い（中略）吾輩はここで始めて人間といふものを見た。』</p> <p>■「越後の春日を経て今津へ出る道を、珍しい旅人の一群が歩いてゐる。母は三十歳を（中略）と云って励まして歩かせようとする。』</p> <p>■「或日の事でございます。御釈迦様は極楽の蓮池のふちを、（中略）極楽は丁度朝なのでございましょう。』</p> <p>■「小諸なる古城のほとり 雲白く遊子悲しむ （中略） 濁り酒濁れる飲みて 草枕しばし慰む」</p> <p>■「たのしみはまれに魚煮て兎ら皆がうまうましといひて食ふ時」</p> <p>■「まだももは流れてこぬに子はねいり」</p>

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
東京書籍	<p>むかしばなしを よんで もらおう (一下) 「花さかじいさん」 (内容省略)</p> <p>言いつたえられて いる お話をしろ (二上) 「いだらぼうの お話」 (内容省略) *以下は神話の一部を紹介 「やまたのおろちの お話」 「いなばの 白うさぎの お話」 ■「海さち 山さち」</p> <p>言いつたえられて いる お話を読もう (二上) 「いなばの 白うさぎ」 (内容省略)</p> <p>むかし話を しょうかいしよう (二下) 「かさこじぞう」 (内容省略)</p> <p>おばあちゃんに 聞いたよ (二下) 「十二支」 「春の七草」 「小の月」 「いろはうた」</p>	<p>俳句に親しもう (三上) ☆「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」 「雪とけて村いっばいの子どもかな」 「菜の花や月は東に日は西に」 ☆「ゆさゆさと大枝ゆるる桜かな」 ☆「青蛙おのれもペンキぬりたてか」 ☆「万緑の中や吾子の歯生え初むる」 ☆「ひつぱれる糸まつすぐや甲虫」 ☆「赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり」 ☆「をりとりてはらりとおもきすすきかな」 「名月を取ってくれと泣く子かな」 ☆「遠山に日の当たりたる枯野かな」 ☆「雪の朝二の字二の字の下駄の跡」 ☆「スケートの紐むすぶ間も逸りつつ」</p> <p>☆日本の俳句 (三上) ☆「さみだれをあつめて早し最上川」 ☆「蟬鳴くや六月村の炎天寺」 ☆「ほろほると石にこぼれぬ萩の露」 ☆「荒海や佐渡によこたふ天河」 ☆「石山の石より白し秋の風」 ☆「鞆の津の沖ゆく帆あり明易き」 ☆「秋風や浜坂砂丘少しゆく」 ☆「稻籾あり飯の山あり昔今」</p> <p>☆日本語のしらべー夏 (三上) ☆「大蛍ゆらりゆらりと通りけり」 ☆「匙なめて童たのしも夏氷」 ☆「大地いましづかに揺れよ油蟬」</p> <p>■「山路来て何やらゆかしすみれ草」 ■「さみだれや大河の前に家二軒」</p> <p>慣用句を使おう (三下) 「ねこの手もかりたい」 ☆「道草を喰う」 「馬が合う」 「ねこのひたい」 「雲をつかむ」</p>	<p>古文を声に出して読んでみよう (五年)</p> <p>「今は昔、竹取の翁といふ者あり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。</p> <p>その竹の中に、もと光る竹なむ一すじありける。あやしがりて、寄りて見るに、つつの中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり。」</p> <p>「祇園精舎のかねの聲、 諸行無常のひびきあり。 沙羅双樹の花の色、 盛者必衰のこわりをあらはす。 おごれる人も久しからず、 ただ春の夜の夢のごとし。 たけき者もつひにはほろびぬ、 ひとへに風の前のちりに同じ。」</p> <p>☆「月日は百代の過客にして、行き交ふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅を栖とす。」</p> <p>■「つれづれなるままに、日くらし、すずりに向かひて、心にうつりゆくよしなしごとを、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。」</p> <p>■「山のあなたの空遠く 「幸」 住むと人のいふ。 ああ、われひとゝ尋めゆきて、 涙さしぐみ、かへりきぬ。 山のあなたになほ遠く 「幸」 住むと人のいふ。</p> <p>■「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」</p>

小学校国語教育における基礎的素養の考察(4) 伝統的な言語文化に関わる教材について②

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
東京書籍		<p>☆「かみなりが落ちる」 「うり二つ」 ☆「頭をひねる」 ☆「のどから手が出る」 ■「さばを読む」 ■「波に乗る」 ■「朝めし前」 ■「ごまをする」 ■「手にあせをにぎる」 ■「うでが鳴る」 ■「あいづちを打つ」 ■「ブレーキをかける」 ■「のれんを下ろす」</p> <p>わらい話を楽しもう(三下) ☆「白ねずみ」 ☆「はとが聞くから」</p> <p>☆日本のわらい話(三下) ☆「吉四六さんのお話」 ☆「一休さんのお話」 ☆「彦一さんのお話」</p> <p>日本語のしらべー秋(三下) ☆「よるこべはしきりに落つる木の 実かな」 ☆「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」 ☆「いっせいにきのご隠るる茸狩り」 ☆「戸を叩く狸と秋を惜しみけり」 ☆「街道をきちきちととぶ蟻蛸かな」</p> <p>「ことわざブック」を作ろう(四上) 「さるも木から落ちる」 ☆「あぶはち取らず」 「石に上にも三年」 「ちりも積もれば山となる」 「良薬は口に苦し」 ☆「急がば回れ」 「転ばぬ先のつえ」 ☆「善は急げ」 ■「ねこに小判」 ■「えびでたいをつる」 ■「笑う門には福きたる」 ■「ぬかにくぎ」 ■「飛んで火に入る夏の虫」</p>	<p>古文に親しもう(五年) 「春は、あけぼの。 やうやう白くなりゆく山ぎは、 少し明かりて、紫だちたる雲の細 くたなびきたる。 夏は夜。月のころはさらなり。 (中略) 秋は夕暮れ。夕日の差して山の 端 (中略) 冬はつとめて。雪の降りたるは 言ふべきにもあらず、 (中略) 白き灰がちになりてわろし。」 *夏、秋、冬の項は新採用</p> <p>☆日本語のしらべー春(五年) ☆「外にも出よ触るるばかりに春 の月」 ☆「家々や菜の花いろの燈をとも し」 ☆「うすべにに葉はいちはやく萌 えいでて咲かむとすなり山桜花」 ☆「ほろほると山吹散るか滝の音」 ☆「くれなゐの二尺伸びたる薔薇 の芽の針やはらかに春雨のふる」</p> <p>☆日本語のしらべー夏(五年) ☆「目には青葉山郭公初鯉」 ☆「蟻と蟻うなづきあひて何か事 ありげに奔る西へ東へ」 ☆「てのひらのくぼみにかこふ草 蛸移さむとしてひかりをこぼす」 ☆「夏河を越すうれしさよ手に草 履」 ☆「最上川の上空にして残れるは いまだうつくしき虹の断片」 ☆「遠雷やはづしてひかる耳かざ り」</p> <p>☆日本語のしらべー秋 ☆「馬追虫の髭のそよるに来る秋は まなこを閉ぢて想ひ見るべし」</p>

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
東京書籍		<p>           ■「負けるが勝ち」            ■「かっぱの川流れ」            ■「弘法にも筆のあやまり」            ■「二兎を追うものは一兎をも得ず」            ■「一石二鳥」              日本語のしらべー春(四上)            ☆「たんぼぼや日はいつまでも大空に」            ☆「おらが世やそらの草も餅になる」            ☆「春の月噴水は水脱ぎにけり」            ☆「春の海終日のたりのたりかな」            ☆「菜のはなや一本さきし松のもと」              日本語のしらべー夏(四上)            ☆「覚えきれぬ鳥々の名や夏がすみ」            ☆「列車にて遠く見ている向日葵は少年のふる帽子のごとし」            ☆「向日葵は金の油を身にあびてゆらりと高し日のちひささよ」            ☆「もらひくる茶わんの中の金魚かな」            ☆「ところてん煙のごとく沈み居り」            ☆「夏草に機織車の車輪来て止る」              「百人一首」を声に出して読んでみよう(四下)            「嵐吹く三室の山のもみぢ葉は龍田の川の錦なりけり」            「春すぎで夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香具山」            「田子の浦にうちいでて見れば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ」            「奥山にもみぢ踏み分け鳴く鹿の声聞くとときぞ秋は悲しき」            「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」            「君がため春の野にいでて若菜つむわが衣手に雪は降りつつ」            「久方の光りのどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ」            「人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける」         </p>	<p>           ☆「こほろぎのこの一徹の貌を見よ」            ☆「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」            ☆「月はやし梢は雨を待ちながら」            ☆「こんなよい月を一人で見て寝る」            ☆「妹の小さき歩みいそがせて千代紙かひに行く月夜かな」              ☆日本語のしらべー冬            ☆「しらしらと氷かがやき千鳥なく釧路の海の冬の月かな」            ☆「「寒いね」と話しかければ「寒いね」と答える人のいるあたたかさ」            ☆「霜やけの小さき手して蜜柑むくわが子しのばゆ風の寒きに」            ☆「斧入れて香におどろくや冬こだち」            ☆「まばらなる冬木林にかんかんと響かんとする青空のいろ」            ☆「湯たんぼの中のさざなみ抱きけり」              ■「九月つごもり、十月のころ、空うちくもりて、風のいとさわがしくふきて、黄なる葉どもの、ほろほろとこぼれ落つる、いとあはれなり。」            ■「ふるものは、雪。あられ。みぞれは、にくけれど、白き雪のまじりてふるをかし。」              漢文を読んでみよう(六年)            「百聞は一見にしかず」            「一を聞きて以つて十を知る」            「子曰はく、「故きを温めて新しきを知る、以つて師となるべし。」と。」            「一に曰はく、和を以つて貴しとし、         </p>

小学校国語教育における基礎的素養の考察(4) 伝統的な言語文化に関わる教材について②

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
東京書籍		<p>「秋風にたなびく雲の絶え間よりもれいつる月の影のさやけさ」                      「ほととぎす鳴きつる方をながむればただ有明の月ぞ残れる」</p> <p>日本の短歌(四下)                      ☆「神のごと遠く姿をあらはせる                      阿寒の山の雪のあけぼの」                      ☆「筑波嶺の峰より落つるみなの                      川恋ぞつもりてふちとなりぬる」                      ☆「ゆく秋の大和の国の薬師寺の                      塔の上なる一ひらの雲」                      ☆「立山に降り置ける雪を常夏に                      見れども飽かず神からならし」                      ☆「大江山いく野の道のとほければ                      まだふみも見ず天の橋立」                      ☆「日のかげは青海原を照らしつつ                      光る孔雀の尾の道の沖」                      ☆「大阿蘇の山の煙はおもしろし                      空にのぼりて夏雲となる」</p> <p>日本語のしらべー秋(四下)                      ☆「桐一葉日当たりながら落ちにけり」                      ☆「金色のちひさき鳥のかたちして                      銀杏散るなり夕日の岡に」                      ☆「ぐっすりと寝た朝の山が秋の                      山々」                      ☆「紅葉あかるく手紙よむによし」                      ☆「君が手もまじるなるべし花すゝ                      き」                      ☆「行けど萩行けど薄の原広し」                      ☆「ふりむけば鹿がべろんとなめて                      むたきみの鞆がきらきら光る」</p> <p>日本語のしらべー冬(四下)                      ☆「靴紐を結ぶ間も来る雪つぶて」                      ☆「雪だるま星のおしゃべりべちゃ                      くちゃと」                      ☆「誰か来さうな雪がちらほら」                      ☆「おりたちて今朝の寒さを驚きぬ                      露しとしと柿の落ち葉深く」                      ☆「大根引大根で道を教へけり」</p>	<p>忤ふること無きを宗とせよ。」                      ・春暁 孟浩然                      「春眠暁を覚えず                      处处啼鳥を聞く                      夜来風雨の声                      花落つること知る多少」</p> <p>☆いにしへの言葉に学ぶ(六年)                      ☆「初心忘るべからず」                      ☆「天は人の上に人を造らず、人の                      下に人を造らずといへり。」                      ☆「なせば成るなさねば成らぬ何                      事も成らぬは人のなさぬなりけり」                      ☆「学問は、ただ年月長くうま                      おこたらずして、はげみつとむる                      ぞ肝要にて、学びやうは、いか                      やうにてもよかるべく、さのみか                      かはるまじきことなり。」                      ☆「千日のけいこを鍛とし、万日                      のけいこを練とす。」</p> <p>☆日本語のしらべー春(六年)                      ☆「あをあをと空を残して蝶別れ」                      ☆「ちるさくら海あをければ海へ                      ちる」                      ☆「春風や鬪志いだきて丘に立つ」                      ☆「草わかば色鉛筆の赤き粉の                      ちるがいとしく寝て削るなり」                      ☆「不來方のお城の草に寝ころび                      て空に吸はれし十五の心」</p> <p>☆日本語のしらべー夏(六年)                      ☆「音もせで思ひにもゆるほたる                      こぞ鳴く虫よりもあはれなり                      けれ」                      ☆「さびしさや一尺消えてゆくほ                      たる」                      ☆「六月の氷菓一盞の別れかな」                      ☆「ねこの子のくびのすずがねか                      すかにもおとのみしたる夏草                      のうち」                      ☆「かさなれるまろき沙丘の間よ                      りあやめの色す海のすじ」</p>

	第1学年及び第2学年	第3学年及び第4学年	第5学年及び第6学年
東京書籍		<ul style="list-style-type: none"> <li>☆「海に出て木枯帰るところなし」</li> <li>☆「潮の香のみたらしふくみ初詣」</li> <li>☆「くだものメロンを切りぬ冬の日のくだものなれど内暗からず」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>☆「夏草や兵どもが夢の跡」</li> <li>☆日本語のしらべー秋（六年）</li> <li>☆「いそいそとネットを張りて友を待つ豊かに寂し秋のコートは」</li> <li>☆「月見れば千々に物こそ悲しけれわが身ひとつの秋にはあらねど」</li> <li>☆「頂上や殊に野菊の吹かれ居り」</li> <li>☆「葡萄食ふ一語一語の如くして」</li> <li>☆「菊の香や奈良には古き仏達」</li> <li>☆「木の間よりもりくる月のかげみれば心づくしの秋は来にけり」</li> <li>☆日本語のしらべー冬（六年）</li> <li>☆「枯れゆけばおのれ光りぬ冬木みな」</li> <li>☆「冬菊のまとふはおのがひかりのみ」</li> <li>☆「樹氷きららのなだれのはての海のはての空のはてのきららのきらら」</li> <li>☆「霜とけ鳥光る」</li> <li>☆「冬の夜の星君なりき一つをば云ふにはあらずことごとく皆」</li> <li>☆「街をゆき子どもの傍を通る時蜜柑の香せり冬がまた来る」</li> <li>☆「てのひらにてのひらをおくほつほつと小さなほのおともれば眠る」</li> </ul>